地域協働学校だより No. 2

平成３０年６月１９日
新宿区立市谷小学校
地域協働学校運営協議会

「地域協働学校運営協議会」からのご報告です

オリンピック・パラリンピック関連行事として「日本の伝統文化に親しむ」ことをねらいに、６月１３日、古今亭菊志んさんをお迎えして全校児童を対象に落語教室が催されました。見学させていただきましたのでご紹介いたします。

古今亭菊志んさんによる落語教室

６月１３日、末広亭や鈴本演芸場といった寄席でもご活躍中の落語家古今亭菊志んさんをお迎えし、落語という伝統芸能についてのわかりやすいお話に続いて、落語「牛ほめ」の公演、児童たちによる落語体験など、盛りだくさんで笑いの絶えない楽しい落語教室となりました。

落語ってどんなもの？

落語は日本の伝統芸能、でも難しく取らないでほしいです。落語は言わば昔の「お笑い」。笑って嫌なことを忘れる、ちょっと息抜きになる。落語は物語だからたくさんの登場人物が出てくることがあるけれど、それを全部一人の落語家が演じます。

落語の演じ方

続いて落語の特徴的な演じ方を教えてもらいました

・落語で二人の人を演じ分けるときは、上下（かみしも）、つまり顔の向きを変えて会話をします。４人家族でも顔の向きや話し方で、人物が一瞬にして切り替わります。

・落語家が持っている道具は扇子と手ぬぐいの二つだけ。これが見ている人の頭の中でいろいろなものに変身します。たとえば手ぬぐいは、こうすると「手紙」に早変わり、扇子はこうやって目線で長さを想像させれば長い刀にもなるし、昔の煙草を吸うキセルや、もちろんおそばを食べる箸にもなります。**（手紙の内容がイメージできるような演技や、たばこの煙まで見えそうな様子、そしてそばをすする音に児童たちは身を乗り出して大喜びでした。）**

・何も使わなくても表現できることもあります。落語は座ったまま演じますが、体を揺らすことで歩いている様子がわかるし、揺らし方でその速さもわかります。お饅頭を食べるところならこうして…落語では、お客さんに無いものを有るように見てもらいます。**（児童たちは、何の説明も受けなくても、お饅頭を割って食べた後で熱いお茶を飲んだことがわかりました！）**

落語「牛ほめ」

落語には、偉い立派な人ではなく、ぼんやり、ぼーっとした人がよくでてきます…小話に続いて「牛ほめ」を聞かせていただきました。児童たちの笑い声が何度も響きました。特に低学年はツボにはまったようです。

落語体験

各学年から一人ずつ選ばれた児童が、落語のレッスンを受けました。１年生・４年生ペアは「お饅頭を食べてお茶を飲む」、２年生・５年生ペアは「おそばを食べる」、３年生・６年生ペアは小話をする。お饅頭は形や大きさがわかるよう手を丸くして取ること、短い小話にもかけ言葉のオチがついていることなど面白く説明していただきました。おそばの食べ方の時は全児童がその場でおそばの演技をやり始めてしまいました。

質問コーナーより

Q.　いつから落語を始めたのですか？

A.　大学生（20 才くらい）のとき。子供の時はお笑いやものまねをしていましたが、大学の部活で落語を始めました。

Q.　どうやったら落語家になれますか？

A.　師匠に弟子入りしなければいけません。師事したいと思った師匠に頼むんです。

Q.　落語の演目で一番好きなのはどれですか。

A.　「あくび指南」ですね。あくびの仕方をお月謝を払って習うお話です

Q.　落語の素晴らしいところはどこですか？

A.　江戸時代に生まれた落語が、ほぼ同じ内容を平成の今話してもみんなが笑える。人間の営みは変らないんだなあと、ロマンを感じます。

古今亭菊志んさんより

子供たちには、選り好みせず、まずは落語に触れてもらいたいです。今回はオリンピック・パラリンピック企画ということでしたが、子供たちがいつか外国の人に、日本の落語ってどんなもの？と聞かれたときに、答えられるようであってほしいですね。

児童たちは熱心に聞き入っては大きな笑い声を響かせていて
菊志んさんの話術はもちろんのこと、子供たちの笑顔にも
楽しい気持ちになりました。この機会に日本の伝統文化に興味を
持つ子も少なくなかったと思います。
素晴らしい機会を有難うございました。

古今亭菊志ん さん プロフィール

1971 年　広島県生まれ

１９９４年４月　古今亭圓菊に入門

１９９４年６月　前座となる前座名「菊朗」

１９９８年５月　二つ目昇進

２００７年３月　真打昇進「菊志ん」と改名

寄席での公演のほか CD、DVD も出版、受賞歴多数。学校公演・親子寄席なども大好評。市谷小児童の保護者。